



戦争で犠牲となるのはだれか 権力者の本質を示した橋下発言

戦争では兵士に慰安婦制度が必要だと暴言を吐いた橋下大阪市長に東京新聞のコラムは次のような批判をしています。

「慰安婦制度は必要だった」と明快に言い切る政治家には、兵士を派遣する立場の視点しかない。自らが一兵士として列に並び、妻や娘が慰安婦になる姿など想像できないのだろう。

東京新聞『筆洗』5／16

的確な批判です。東京新聞が批判するように、橋下市長は自分が兵士として戦場に行くという立場から発言しているわけではありません。あくまでも「兵を派遣する」立場からの主張です。いいかえるならば自分は絶対に戦地には行かないということです。

このような立場に立っているのは橋下市長だけではありません。安倍首相など憲法9条改悪・自衛隊の軍隊化・海外の権益を守るために軍隊を派遣しようと主張している人たちはすべて、自分は兵士として戦地に行くつもりはないのです。

かつての戦争も、戦争を推進し軍隊を派遣した側の人間＝権力者は誰一人兵士として闘ってはいません。兵士として戦争に駆りだされ戦地で死んでいったのは、自分が望んでもいないのに一枚の紙切れで強制的に徴兵された労働者や農民でした。

東京新聞では橋下市長は「賞味期限切れ」だという市民の声も紹介されています。橋下市長は当然ですが、憲法9条を否定し軍備増強と戦争を肯定する全ての政治家も「賞味期限切れ」とし放逐しなければなりません。